OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞フランク・ジャクソン著『形而上学から倫理学へ　概念分析の擁護』Frank Jackson : From Metaphysics to Ethics : A Defence of Conceptual Analysis, Oxford : Clarendon Press, 1998.
Author(s)	仲宗根, 勝仁
Citation	メタフュシカ. 2015, 46, p. 93-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54521
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《文献紹介》
フランク・ジャクソン著
『形而上学から倫理学へ　概念分析の擁護』
Frank Jackson: *From Metaphysics to Ethics: A Defence of Conceptual Analysis,* Oxford: Clarendon Press, 1998.

仲宗根勝仁

はじめに

本書は、知識論証（knowledge argument）を考案したことで知られるフランク・ジャクソンの主著である。本書は全 6 章構成であり、前半 3 章は形而上学（特に物理主義）、スーパーヴィーニエンス、概念分析という三つのトピックが論じられ、後半 3 章は色と倫理的（道徳的）性質についての形而上学的考察がなされている。本書の眼目は、ジャクソン自身が序文で述べている通り、概念分析の再評価である（p.i）[1]。本書の章立てを確認しておこう。

第 1 章　真剣な形而上学とスーパーヴィーニエンス
第 2 章　概念分析の役割
第 3 章　概念分析と形而上学的必然性
第 4 章　色についての第一性質見解
第 5 章　倫理の位置づけ問題：道徳的性質と道徳的内容
第 6 章　分析的記述主義

本稿では、主に前半部分の議論、特に、スーパーヴィーニエンスによる哲学的立場の特徴づけ、形而上学における概念分析の必要性、二次元様相論理にもとづく概念分析について詳しく紹介し、後半部分については、前半部分の議論を踏まえた上で彼の立場を紹介するにとどめる。

[1]　以下、本書からの引用・参照の際は、ページ数を記載して示す。

物理主義とスーパーヴィーニエンス・テーゼ

本書第 1 章でジャクソンは、位置づけ問題（location problem）に対処する方法として伴立[2]による登録（entry by entailment）を提案し、その方法を物理主義やその他のトピックに適用する。以下では、これらの道具立てを説明しつつ、彼が行った物理主義の特徴づけを紹介する。

ジャクソンが「真剣な形而上学（serious metaphysics）」と呼ぶ形而上学とは、制限された構成要素によって何らかの主題（心、自由意志など）の包括的な説明を追求する形而上学である（pp.4-5）。物理主義は、私たちの世界についての十全な説明に物理学的な概念のみを用いるという制約が課されているという意味で、まさに真剣な形而上学の一例である。ここで、物理学では用いられない概念は不必要なものとして消去されるのか、それとも物理学的な説明の中にその居場所を得るのか、という位置づけ問題が発生する。

この問題に対するジャクソンの答えはこうである。私たちの世界は物理学的な概念だけで十全に説明されるが、物理学で用いられない概念は物理学的な説明の中に暗に示されている（implicit）、すなわち物理学的な説明がその概念を伴立する（p.5）。これが伴立による登録という方法である。

伴立による登録の考え方をより明確にするために用いられるのが、スーパーヴィーニエンスの概念である[3]。再度、物理主義を例に確認しよう。ジャクソンは、物理主義は偶然的なグローバル・スーパーヴィーニエンスによって特徴づけられるとする[4]。そのテーゼは次のものである。

> （B）私たちの世界のミニマルな物理的複製である任意の世界は、私たちの世界の端的な複製である。（p.12, 強調は著者による）[5]

このテーゼは、私たちの世界に物理的に類似している世界は私たちの世界に端的に類似している、というスーパーヴィーニエンスの関係を反映している。このテーゼが偶然的なのは、私たちの世界に（物理的に）類似している世界という制限があり、従ってこのテーゼの真偽が私たちの世界がどのような世界であるかに依存するからである（p.12）。例えば、私たちの世界がデカルト的二元論の成り立つ世界なら、私たちの世界の物理的複製が端的に私たちの世界の複製だとは限らず、（B）は偽である。

テーゼ（B）は物理主義の本質的主張を捉えている（pp.13-14）。（B）が偽だと仮定すると、私たちの世界の最小限の物理的複製であるにも関わらず私たちの世界とは異なるような世界がある

---

[2] 「伴立 entailment」は「必然的な含意」あるいは「厳密含意（strict implication）」を意味する。

[3] ある性質 A がある性質 B にスーパーヴィーンするとは、「B についての相違なしに A についての相違はありえない」ということである。これは言い換えると、「B について類似するなら A についても類似する」ということである。

[4] デイヴィッド・ルイスやデイヴィッド・チャーマーズなども同様の特徴づけをしている。David Lewis, “New Work for a Theory of Universals”, in *Australasian Journal of Philosophy,* 61, 1983, pp.343-377; David Chalmers, *The Conscious Mind*, Oxford University Press, 1996, pp.41-42 を参照。なお、「グローバル」は、世界のあり方についてのスーパーヴィーニエンスを表している。これに対して「世界内（intra-world）」スーパーヴィーニエンスは、世界ではなく、ある世界の内に存在する個体の性質についてのスーパーヴィーニエンスを表す（p.9）。

[5] ある世界が私たちの世界のミニマルな物理的複製であるとは次の（a）と（b）を満たす世界である。（a）その世界が物理学的な点で私たちの世界と正確に類似しており、（b）（a）を満たすためになければならない種や個物以外は含まない。（p.13）

ことになり、物理主義は偽である。逆に、物理主義が偽だと仮定すると、私たちの世界は非物理的本性（non-physical nature）を含むことになり、その本性は私たちの世界の最小限の物理的複製には含まれず、従ってその複製は私たちの世界の複製ではない、つまり（B）は偽である。

もし（B）が真なら、伴立による登録によって私たちは様々な非物理学的なものについての位置づけ問題を物理主義的に解決できる。ジャクソンに従い、心理学的な文を例にとろう。もし（B）が真なら、私たちの世界の物理的複製である任意の世界は端的に私たちの世界の複製であり、従ってそれは私たちの世界の心理学的複製でもあるはずだ。私たちの世界についての物理学的説明をΦ、私たちの世界の心理学的本性についての任意の真なる文をΨとしよう。Ψは私たちの世界と心理学的に異なる世界で偽である。さて、このとき、（B）が真だとすると、Φが真である世界はすべて私たちの世界の端的な複製であり、またその世界は私たちの世界の心理学的複製でもあり、従ってΨもまたその世界で真であろう（p.25）。すなわち、Φが真であるすべての世界でΨが真であり、従ってΦはΨを伴立する。このようにして、心理学的文は物理学的説明の中にその居場所を得るのである。

形而上学における概念分析の役割

本書第2章でジャクソンは、伴立による登録のためには概念分析が必要だ、という主張を擁護すると同時に、自身の考える概念分析を明確化する。

ジャクソンによれば、概念分析は信仰の行為の回避や主題の定義に必要である。本稿では、主題の定義の議論を紹介する。自由意志が決定論と両立するかどうかを私たちが考える際、まず自由意志が通常どのように考えられているのかを明らかにし、その上で決定論と自由意志の概念とが両立可能かどうか考える。ある主題についての通常の概念あるいはその民間理論（folk theory）は、「可能な諸事例についての私たちの直観」（p.32）によって明らかにされる。すなわち、どの事例が自由な行為の事例でどの事例がそうでないかについての私たちの直観が自由意志の概念を明示化する。ジャクソンの言う概念分析とは、明示化されていないある主題の通常の概念あるいは民間理論を、その主題にまつわる可能な諸事例についての直観をもとに明示化することである（p.32）。

ジャクソンは上記の意味での概念分析が持ついくつかの性質について議論しているが、本稿では、概念分析がある意味でアプリオリな帰結を持つという議論を紹介する。

まずジャクソンは、二次元様相論理（two-dimensional modal logic）の説明から始める。二次元様相論理において、可能世界には二つの見方――現実（actual）あるいは私たちの世界（our world）か、反事実（counterfactual）か――がある。この区別を認め、更に内包を可能世界から外延への関数とみなす内包論理の考えに従うなら、私たちは二種類の内包――A-内包（A-intension）とC-内包（C-intension）――を得ることになる。A-内包は、世界が現実と見なされる仮説の下で外延を選び出す関数であり、C-内包は、世界が反事実的と見なされる仮説の下で外延を選び出す関数である（p.48）。詳細は省くが、A-内包は特定の事実あるいは発見によらずに外延を決定する内包であり、C-内包は現実世界における特定の事実あるいは発見に依存してその外延が決まる内包である。「水」という自然種名を例に説明する。水がH_2Oという組成を

持つということは科学的発見である。「水」の A- 内包は、そのような科学的発見に依存しない、私たち（あるいは水が H_2O であることが発見される以前の人々）が見知った水の役割（例えば、海や川にあり、空から降ってくることがあり、飲むことのできる液体）を持つ物質を外延として選び出す内包である。それに対して「水」の C- 内包は、科学的発見によって明らかになった水についての特定の事実に依存してその外延（すなわち H_2O）が決定される。「水」の A- 内包は、現実世界が実際にしかじかである、という事実が判明する前から理解される内容を表し、その外延は現実世界がどのようであろうとも水物質（watery stuff）である（p.50）。それに対して「水」の C- 内包が選び出す外延は H_2O であり、それは現実世界における発見に依存する（p.50）。

A- 内包は、現実世界が実際にどのようであるかに依存せずにその外延が決定される内容を持っている。言い換えると、A- 内包の知識は現実世界の本性についての知識を要求しない（p.50）。そして、ある主題の概念分析の際に、可能な諸事例が現実世界の特定の事実に依存しない仕方で記述されるなら、それは A- 内包の観点からの記述であり、従ってアプリオリな概念分析が行われている（p.51）。ただし C- 内包の観点から概念分析がなされる場合、その概念分析はアポステリオリである（p.51）。

物理主義におけるアプリオリな演繹可能性

本書第 3 章でジャクソンは、概念分析に関するいくつかの批判への応答と、二次元様相論理の道具立てを用いた物理主義におけるアプリオリな演繹可能性の擁護を行っている。本稿では、前節の二次元様相論理の説明と関連した物理主義におけるアプリオリな演繹可能性（a priori deducibility）の擁護を紹介する。

前述した二次元様相論理の分析が正しいとすると、可能世界の記述には二つの仕方――A- 内包の観点からのものと C- 内包の観点からのもの――があるはずである。それでは、物理主義に基づく伴立による登録は A- 内包の観点からのアプリオリな伴立なのか、それとも C- 内包からのアポステリオリな伴立なのか、という問題が生じる。すなわち、十全な物理学的説明から他の任意の非物理学的文（例えば心理学的文）をアプリオリに演繹できるのかどうか、というアプリオリな演繹可能性についての問いが生じる。ジャクソンはこの問いに対して「できる」と答える（p.68）。以下でこのことを見ていこう。

議論の前提として、十全な物理的説明が他の任意の非物理学的文を伴立するということは、「伴立」の意味上その含意関係は必然的である。これはテーゼ（B）からも明らかである。問題は、その関係がアプリオリ（あるいは概念的）なのかどうかである。クリプキの『名指しと必然性』における議論が正しいとすれば、ある関係が単に必然的だというだけではその関係がアプリオリだと言うことはできない。例えば、「水は H_2O である」がクリプキの言うように必然的真理を表すとしても、それは形而上学的な意味での必然的真理であり、概念的には偶然的である（「水」の概念と「H_2O」の概念に伴立関係は成り立たない）ように思われる。だからこそ、その文は必然的真理であるにも関わらずその必然性がその文の理解だけでは知りえない、すなわちアポステリオリな必然的真理を表すとされるのだ。ジャクソンはこの形而上学的／概念的必然性という区

別は必要なく、一種類の必然性だけが必要だと主張する（p.76）が、本稿でその詳細には立ち入らない。ここで重要なのは、ジャクソンによる以下の議論である（pp.81-83）。次の論証は C- 内包の観点からすると妥当（必然的な関係）である。

（1）H_2O は地球のほとんどを覆っている。
（2）それゆえ、水は地球のほとんどを覆っている。

しかしこの論証の妥当性は、「水」の A- 内包の観点から、すなわち「水」などの語の理解だけでは分からない。「水」を理解する（すなわち A- 内包が選び出す外延を知る）には、その外延が私たちの見知っている水の役割を果たす物質（水物質）だと知っているだけで十分であり、その物質が H_2O だとまで知っている必要は無いからだ。この意味で、この論証はアプリオリではない。しかし、次の論証の妥当性はアプリオリに知ることができる。

（1） H_2O は地球のほとんどを覆っている。
（1a）H_2O は私たちが見知っている水物質である。
（2） それゆえ、水は地球のほとんどを覆っている。

これが意味するのは、（1）に（1a）という更なる（経験的）情報を付け加えることによって、（2）がそれらからアプリオリに帰結するということである。この考察は、物理主義にも応用できる。ジャクソンの言葉を引用しておこう。

> もし物理主義が正しければ、現実世界がどのようであるかについて表現される命題を得るのに必要な情報はすべて物理的な語によって与えられる（中略）。それゆえ物理主義は、物理学的なものから心理学的なものへの原理的にアプリオリな演繹可能性にコミットしている。（p.84）

混乱を避けるためにいくつか補足しておこう。まず、このようなアプリオリな推論は、依然としてその結論（2）それ自体がアプリオリに知りうるということを意味しない。あくまで、（1）と（1a）を前提として、そこからアプリオリに結論（2）が引き出される、ということである。また、物理学の営み自体はアプリオリなものではない。彼が主張しているのは、現実世界についての十全な物理学的説明が物理主義の前提として与えられるなら、その物理学的説明から他の真理がアプリオリに導き出される、ということである。

色の位置づけ問題

本書第 4 章では、色の位置づけ問題について議論されている。色はどこにあるのか。私たちの経験の内にあるのか、それとも世界の側にあるのか、それとも色は存在しないのか。この問いに

対するジャクソンの回答は、「オーストラリア的」見解である（p.87）。それでは、ジャクソンの見解及び、その見解と前述の伴立による登録の議論との関係を確認しておく。

色についてのオーストラリア的見解によれば、色は対象の物理的性質である。これは「色の第一性質見解」とも呼ばれる。ジャクソンは、色の名前例えば「赤」は私たちが対象を見た時の経験に付けられる名前ではなく、対象が持つ性質に付けられる名前である（p.89）。例えば、私が郵便ポストを見た時、私はそのポストについて「赤い」と判断するのであって、私の内観についての判断をしているのではない。これを、色についての主要な直観（prime intuition）として要約することができる。

> 「赤」が表示する（denotes）のは、ある対象が赤く見える際に視覚経験において提示されると思われる、対象の性質である。（p.89）

色について言えば、ジャクソンは伴立による登録を用いて位置づけ問題に対処してはいない。これは、色の名前が表示するのは、対象の物理的性質だからである。すなわち、もしこれが正しければ、色は物理学の用語の一つであるから、そもそも伴立による登録は必要ないのである。

倫理的（道徳的）性質の位置づけ問題

本書第 5 章と第 6 章でジャクソンは、倫理的（道徳的）性質の位置づけ問題について議論している。彼はこの二つの章で、功利主義が自身の理論と親和的であることを示唆したり、開かれた問い論法（open-question argument）に応答したりと、倫理学の分野の主要トピックについても興味深い議論を展開しているのだが、本稿ではメタ倫理学的考察の紹介にとどめる。

ジャクソンの立場は、倫理的文は真理傾向的（truth-apt）とする立場であり、従って認知主義（cognitivism）である（p.113）。ジャクソンは倫理的性質についてのスーパーヴィーニエンス・テーゼを用いて自身の認知主義の立場を明らかにする。

> （S）すべての w と w* について、もし w と w* が記述的に正確に類似しているなら、それらは倫理的にも正確に類似している。（p.119）

このテーゼが物理主義のテーゼと異なるのは、制限なしにすべての世界についてスーパーヴィーニエンスが成り立つことである。言い換えると、テーゼ（S）は（記述的情報以外の情報を必要とすることなしに）アプリオリかつ必然的なテーゼである（p.119）。これは、任意の倫理的文が記述的説明によって伴立されることを意味し、従って伴立による登録が成立する。ジャクソンは更に強く、任意の倫理的文にはそれと同値な記述的文の集合がある、と主張する（p.122）。ただし、ある倫理的文とある記述的文との同値性を一対一対応で説明するわけではない。彼は、道徳機能主義（moral functionalism）の立場を擁護し、（必要な理想化を施した）道徳的意見、直観、原理そして概念のネットワークである円熟した民間道徳（mature folk morality）が全体論的に道

徳的用語の意味を決定する（p.130）、という立場を擁護する。

倫理的文と記述的文（あるいは関連する記述的文の集合）との同値性を認める立場は分析的記述主義（analytical descriptivism）と呼ばれる（p.139）。分析的記述主義の立場をより明示的にするために、ジャクソンはコーネル実在論（Cornell realism）との比較をする。コーネル実在論は、（a）倫理的性質は記述的性質と同一であり、（b）同一性の関連する言明は必然的アポステリオリであり、（c）記述的な語で倫理的述語と倫理的文を分析するのは不可能だ（pp.144-145）という立場である。ジャクソンは、（a）には同意し、（b）には中立的だが、（c）には反対している。

おわりに

物理主義や認知主義をスーパーヴィーニエンス・テーゼによって特徴づけるジャクソンの説明は興味深いものであり、また本稿では扱えなかったが、物理主義や色の第一次性質見解、認知主義に対する様々な批判へのジャクソンの応答は、その立場を擁護／再批判する際の試金石になっている。この意味で、本書は現代の分析哲学の古典と言っても過言ではない。また、自然主義の立場にありながら分析性あるいはアプリオリ性の概念を擁護しようと試みている点も特徴的である。

更に、本書は二次元意味論の重要文献としても広く知られており、現在もなおジャクソンは二次元様相論理の有用性を認めている[6]。またジャクソンは、スコット・ソームズによる命題の可能世界分析批判及び指示の記述理論批判[7]の標的の一人となっており、その批判に対するジャクソンの応答もある[8]。このように、本書は言語哲学の（ややマニアックな）領域においても重要な位置を占めている。更に踏み込んだことを言えば、本書における概念分析に基づく形而上学的考察は同時に言語哲学的・意味論的考察にもなっており、伝統的な分析哲学の手法（言語分析）を現代的にアップデートしたものとも考えることができる。

ただし、本書におけるジャクソンの議論は、物理主義や認知主義を積極的に擁護する論証を与えているわけではない。むしろ、物理主義や認知主義を正しいと思う者がいかなるテーゼにコミットすることになるのか、あるいは物理主義や認知主義について誤っていると思う者がいかなるテーゼにコミットすることになるのかを明らかにした、というのがジャクソンの議論の評価として適当であろう。もちろん、ジャクソン自身、アプリオリな演繹可能性を認める物理主義や道徳的機能主義に基づく分析的記述主義など、独創的な見解を多数提示しその批判への応答を試みているが、その議論の多くが論争の余地のある理想化を伴っており、また、概念分析が形而上学に必要であるということや、アプリオリな演繹可能性が物理主義に要求されるということも説得的には論じられていないように思われる。特に、アプリオリな演繹可能性について言えば前述のソームズや他の哲学者からの批判も多い[9]。

6　例えば Jackson, “Why we need A-intensions”, in *Philosophical Studies*, 118, 2004, pp.257-277 を参照。

7　Scott Soames, *Reference and Description: The Case against Two-Dimensionalism*, Princeton University Press, 2005.

8　Frank Jackson, “Reference and Description from the Descriptivists’ Corner”, in *Philosophical Books*, Vol. 48, No. 1, January, 2007, pp.17-26.

9　例えば、William G. Lycan, “Serious Metaphysics: Frank Jackson’s Defence of Conceptual Analysis”, in *Minds, Ethics, and Conditionals*（ed. Ian Ravenscroft）, Oxford University Press, 2008, pp.61-83 を参照。

とは言うものの、これらの指摘はジャクソンの議論の重要性を損ねるものではなく、更なる哲学的考察が必要であるということを示しているに過ぎない。

（なかそねかつひと　哲学哲学史・博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 DC）